

[人間と文化 207 ～ 213 (2017)]

固有名詞を先行詞とする非制限的關係詞節とコンマについて

マユー あき
(総合文化学科)

Non-restrictive Relative Clauses with a Proper Noun Antecedent and the Usage of Commas

Aki MAHEU

キーワード：非制限的、関係詞節、固有名詞、コンマ

Keywords : non-restrictive, relative clause, proper noun, comma

1. はじめに

関係詞節は、伝統的に制限的關係詞節と (restrictive relative clause) と非制限的關係詞節 (non-restrictive relative clause) の2つに分けられる。制限的關係詞節は、先行詞である名詞句の指示範囲に制限を加えるように機能する。

(1) a. They only take overseas students who they think have lots of money.

b. She was offended by the letter that accused her of racism.

(Huddleston and Pullum 2002:1064)

(1a) では、who they think they have lots of money という関係詞節が overseas students という集合のうち、「お金を多く所持していると彼らが思っている留学生」という部分集合を形成するように働き、(1b) では、that accused her of racism という関係詞節は彼女が腹を立てた手紙を同定するように機能する。このように制限的關係詞節は意味的に主節に従属し、文全体としては1つの事柄を述べることになる。これに対し、(2a,b) の関係詞節は先行詞の

指示範囲を制限するのではなく、先行詞に新たな情報を付け加える働きをする。

(2) a. They only take overseas students, who they think have lots of money.

b. She was offended by the letter, which accused her of racism. (*ibid.*)

(2a) では、関係詞節は「留学生たちがたくさんのお金を所持していると彼らは思っている (ので)」という新たな情報を主節の表す情報に追加する。(2b) においても、文脈からすでに特定された先行詞 the letter について、関係詞節が追加情報を付け加えるように働く。このように、非制限的關係詞節は意味的に主節から独立し、主節とは別個の情報を追加するように機能するので、文全体としては二つの事柄が述べられていると感じられる。

この制限的關係詞節と非制限的關係詞節の区別は、書かれた場合には、通例、コンマの有無によって示される。制限的關係詞節ではコンマの挿入はないが、非制限的關係詞節では文末に位置する場合はその前に、文中に位置する場合はその前後にコンマ

が置かれる。しかし、実際には意味的に非制限的關係詞節としか解釈できないにもかかわらず、形態上は制限的關係詞節のようにコンマを伴わない場合がしばしば見られる。小論では、先行詞が固有名詞やそれに準じる名詞句の場合に見られるこのような現象を取り上げている吉田 (1985b) と中山 (2010) を概観し、固有名詞を先行詞とする非制限的關係詞節とコンマの有無の関係をどのように説明できるか考えてみる。

2. 吉田 (1985b)

固有名詞は、「こう言うだけで誰 (何) を指すかが一義的に決まる」(長原 1990:29) という唯一的な指示性 (unique reference) を備えているので、制限的關係詞節をとることができないとされる。しかし、(3a) のように同名の人物が複数存在しているため区別する必要がある場合や、(3b) のように一人の人物が持つ複数の異なる側面を比較・対照する場合には、制限的關係詞節によって修飾することができ、先行詞の固有名詞には冠詞が伴う。

(3) a. Which White are you referring to, the White who is a singer or the White who is a doctor?

b. She was not quite certain that the Edward who wrote to her now was the same Edward that she had known.

(吉田 1985b:213(16))

このように固有名詞は普通名詞化することで制限的關係詞節によって修飾されることが可能になるが、吉田はそれとは異なる現象として、現代英語 (小説) から集めた (4) を示している。

(4) a. Innes relayed the news to Wainwright who covered his face with a hand as if in a prayer.

b. Meanwhile she had dialed the office number of Mr. Wainwright who answered personally.

- c. She glance at Nolan Wainwright who shrugged and said quietly:
- d. "You naughty girl," Marjorie waggled her finger at Jennifer who looked first at her mother, then at her nanny, then back to her mother.
- e. He showed it to O'Malley who got up at once and hurried to the phone.
- f. She placed it (= the large roast of beef) on the table in front of Mike who stood up and carved it (*ibid.* :211(18))

吉田は、(4) のような現象はコンマを伴わないものの、(5) の典型的な非制限的關係詞節の継続用法と同じであると言う。

(5) He had seen my aunt give this person money outside the garden rails in the moonlight, who then slunk away and was seen no more. (*ibid.* :210-209(19-20))

(4) のいずれの文においても、(5) と同様、関係詞節の表す出来事が主節の表す出来事の後に起こることは明らかであるため、コンマが無くても意味の曖昧さを引き起こす危険がない文脈では、言葉の経済学に従ってコンマが省略された可能性があるとして述べている。

さらに、吉田が現代英語から収集した固有名詞を先行詞とするコンマを伴わない非制限的關係詞節の93例の中には、(4) のように非制限的關係詞節の継続用法と意味的にも統語的にもパラレルな関係にあると捉えることができない (6) の例も含まれる。

(6) a. I owe a special gratitude to Rena Somerville who, as my secretary in the last few years, has typed so many versions of certain sections of my manuscript that she could probably reproduce at least the gist of them from memory!

- b. I am especially grateful to Paul Neubauer who worked with me through every inch of the dissertation.
- c. The author wishes to express his gratitude to Noam Chomsky and Paul Postal who, giving freely of their time, influenced virtually every aspect of this book.
- d. She was talking to Mr. Symmington who, huddled in a chair, was looking completely dazed.
- e. Heads turned to Jerome Patterson who had the decisive vote.

(*ibid.* :211-210(18-19))

(6) のような現象が起こる理由について、吉田は納得のいく説明はできないと断りつつも、これらの関係詞節が文末の位置を占めていることに注目する。文の情報構造の観点から見ると、一般に文末は文の焦点 (focus) となりやすく、新情報 (new information) を表す位置となる。このことから、吉田は (6) の関係詞節は文の主張 (assertion) を表しているとみなすことができ、そうすると (6) の各文における関係詞節は一見、制限的關係詞節のようではあるが文の主張という観点から見直すと、実質上は新たな情報を付け加える非制限的關係詞節と変わらないことになると言う。そして、コンマの有無は文法性に影響を及ぼすほどではなく、(4) と同様、言葉の経済学に従ってコンマが省略された可能性を示唆している。

吉田の固有名詞を先行詞とするコンマを伴わない非制限的關係詞節についての考察は、コンマの有無という違いを除けば、意味的・統語的に、または文の主張の観点から、典型的な非制限的關係詞節と実質的に変わらないものと見なすことができるとし、コンマは言葉の経済学に従って省略されたとまとめることができる。しかし、ここで気になるのは、吉田が考えるように、コンマには意味解釈上の曖昧さを生じる危険がなければ省略できてしまうほどの働きしかないのかということである。コンマの持つ意

味合いを少し過小評価しているのではないだろうか。さらに、(6) のような現象は、目的語を先行詞として関係詞節が文末に来る場合だけでなく、(7) のように主語の後に来る場合もある。

- (7) The father who had planned my life to the point of my unsought arrival in Brighton took it for granted that in the last three weeks of his legal guardianship I would still act as he directed.

(Huddleston and Pullum 2002:1064)

(7) における先行詞は固有名詞ではないが、それと同等に唯一的な指示を持つ固有名詞に準じる名詞句である。したがって、その先行詞に続く関係詞節は意味的には非制限的と解釈されるが、コンマを伴っていない。このように主語の後にくるコンマのない非制限的關係詞節については、文末に關係詞節が位置する (6) についての吉田の考え方では説明ができない。

3. 中山 (2010)

中山は、コンマを伴わない非制限的關係詞節を説明するために、制限節を含めて関係詞節全体と関連付けた考察を試みている。その足掛かりとして注目したのは、(8) に示す中島 (1971) の関係詞節の4分類である。

- (8) a. Restrictive (制限的)
 - ex) Any book which is about linguistics is interesting.
- b. Descriptive (記述的)
 - ex) I bought a book which was about linguistics.
- c. Appositive (同格的)
 - ex) This book which is about linguistics, is interesting.
- d. Continuative (連続的)
 - ex) I bought a book yesterday, which I will give to you later.

(中島 1971:25)

中島(1971)の分類の特徴は、従来、制限的關係詞節と考えられていた(8b)のような關係詞節を、新たに「記述的」(Descriptive)機能として区別している点である。中島(1971)が、(8b)の關係詞節はa bookを制限するというより、a bookの説明、記述をしているとしたのは、不定名詞句(indefinite noun phrase)のa bookが特定の本の存在を含意している特定の指示(specific reference)を持つ表現と解釈されることによる。つまり、話し手はすでにある特定の本を頭の中に思い浮かべ、続く關係詞節でその本について記述的に説明を加えていると解釈することができるからである。

中山は、先行詞の名詞句が特定のことは(8c)の「同格的」な場合にもあてはまり、また(8c)は統語的には挿入文の形を取ってはいるが、(8b)と同じく意味的には先行詞の名詞句を修飾していることから、(8b)と(8c)を同じ「記述的」カテゴリーにまとめることが可能ではないかと述べている。ただ、コンマの挿入により、(8c)は主節に対する補足的な情報の追加という談話上の機能が明示されている点で(8b)と異なるので、同一のカテゴリーにまとめた上で、(8b)と(8c)を談話機能の観点からさらに2つに下位分類することを提案する。

中山がこのように提案する根拠として挙げているのが、次の文である。

- (9) We became friendly with some nurses that John had met in Paris.
(OR We became friendly with some nurses, whom John had met in Paris.)
(Swan 2005:485)

(9)は、先行詞の名詞句が特定の不定表現と解釈される場合、制限用法の關係詞節も非制限用法の關係詞節もどちらも従えることができることを示している。これについて、Swan(2005)は、両者の間の違いはわずかな強調の違いであるとし、關係詞節が伝える情報が文全体の意味にとって中心的と感

じられる場合に制限的に用いられ、そうでない場合は非制限的に用いられると述べている。つまり、どちらの關係詞節で修飾するかは、書き手がどれだけの情報を先行詞の特定表現に入れ込もうとしているかによるということだろう。(9)の關係詞節を中島(1971)の(8)の分類で捉え直すと、some nursesに説明を加えるために用いられているので、Descriptiveとなる。そこから、中山は(9)のような關係詞節はまず記述的な機能を持つことが基本となり、DescriptiveかAppositiveのいずれの解釈になるかは、書き手の關係詞節の情報に対する重要性の意識によって決まると言う。

以上の考察を経て、中山は(8)の中島(1971)の關係詞節の機能の4分類を(10)のように修正する。

- (10) a. 制限的(中島(1971)と同一)
b. 記述的 i. 中心的(直接的)
ii. 周辺の(間接的)
c. 継続的(連続的)(中島(1971)と同一)
(中山 2010:21)

中山によると、(10bi)の〈中心的〉な場合は、書き手にとって關係詞節が伝達の中心であると意識されていることを意味し、關係詞節は先行詞とともに1つの情報として提示される。そのため、關係詞節と先行詞の緊密度は高く、接続關係はより直接的となる。それに対し、(10bii)の〈周辺の〉な場合は、書き手にとって關係詞節が追加的な情報として意識されていることを意味し、關係詞節が表す内容は主節の情報とは別個の間接的な情報として提示される。その場合、關係詞節と先行詞の間の緊密度は低くなり、接続關係も緩くなる。中山は、その關係を明示するのがコンマの挿入であると言う。

(10)の中山の分類は、意味的・統語的観点から分類を行った中島(1971)をもとにしながらも、より意味的機能を重視することで記述的機能の枠を拡張、それをさらに關係詞節の情報が先行詞との關係でどのようにまとめられて提示されるかという情報構造の観点から下位分類したものとなっている。そ

ここでは、吉田（1971）のコンマの機能についての考え方と異なり、コンマの有無は関係詞節の情報に対する書き手の重要度の意識を反映しており、コンマは情報構造を明示する機能を持つものとして捉えられている。

さて、従来の二分法の枠の中にとどまる吉田（1971）では、(6) と (7) の両方を納得のいくように説明することができないことを前節において指摘した。それでは、(10) の分類はそのような説明を可能にするだろうか。それができるのがこの分類の利点であると中山は言う。固有名詞を先行詞とする関係詞節を (10) にもとづいて分類すると、継続的な場合を除けば、記述的な関係詞節となる。中山によれば、先行詞が固有名詞であっても、関係詞節の情報が伝達の中心と意識されると、先行詞との緊密度が高くなり、コンマを伴わずに単一の情報として提示される。(6a) の文で具体的に見てみよう。(6a) の主節において、書き手はRena Somervilleに特別に感謝していると述べているが、その理由はRena Somervilleを先行詞として続く関係詞節が伝える情報によってはじめて読み手に理解される。このことから、(6a) の関係詞節は文全体の意味にとって重要な情報として書き手に意識されたと考えられる。加えて、前後の文脈を確認するとわかるが、Rena Somervilleはここで初めて出てくる人物名で、固有名詞であっても先行詞自体が持つ情報量は少ないため、その意味でも関係詞節の情報価値は高まる。以上の理由により、先行詞と関係詞節との結びつきが強くなり、コンマを伴わずに一体化し、単一の情報として提示されたと説明できる。(7) についても、同様の説明が成り立つであろう。先行詞the father自体が持つ情報よりも関係詞節が伝える情報の重要度が高く、伝達の中心と意識されたと考えられる。関係詞節で表される内容は主節の内容を解釈する際に必要な背景的理由にあたる情報を提供しているという点でもその情報の重要度は高くなる。その結果、コンマ無しで関係詞節が先行詞と一体化しているであろう。

筆者が見つけた (11) の例についても、同様な説明が当てはまると思われる。

- (11) The mother understood that the father had divorced her as a way of divorcing himself from the misshapen broke-backed son with the teary, yearning eyes who would never grow up, would never marry, would spend the rest of his life in the fevered execution of eccentric and worthless “art.” (J. C. Oates, “Fossil-Figures” in *The Corn Maiden and Other Nightmares*)

先行文脈から、先行詞the misshapen broke-backed son with the teary, yearning eyesは夫婦の双子の息子のうちの一人であることは明らかであるので、固有名詞と同様に特定の。よって、関係詞節は記述的であるが、コンマを伴っていない。ここでの先行詞はそれ自体、前後の修飾語句により一定の情報量は備えている。しかし、関係詞節で表される内容をみると、この関係詞節が従属する節の内容（父親が母親と離婚したのは、その息子と縁を切るためだったこと）を解釈する上で必要な理由に相当する情報となっていることがわかる。このことから、関係詞節の情報の重要度はより高いものと意識され、先行詞との結びつきが強くなり一体化し、コンマを伴わなかったと考えられる。

4. 継続的關係詞節とコンマの有無

第2節で見たように、コンマを伴わない (4) のような継続的關係詞節については、吉田（1971）は言葉の経済学に従ってコンマは省略されたと考えている。一方、中山（2010）は、主節で表される事態と関係詞節で表される事態との間に高い予測可能性が認められる場合に、コンマ無しで生じる傾向があると言う。

- (12) a. I gave the book to Bill, who sold it to Betty, who read it and then gave it to me for my birthday.
b. Devlin took a large envelope from his inside breast pocket and held it out.

(...) Garvald nodded to his brother who took the envelope, opened it and checked the contents. (中山 2010:22)

(12a) と (12b) の関係詞節はともに継続的であるが、(12b) はコンマを伴っていない。中山 (2010) は、これら 2 つの継続的關係詞節は、主節で述べられる事態から関係節で述べられる事態を読み手として予測することが可能かどうかという点で異なっていると言う。(12a) ではそのような予測は不可能であるのに対し、(12b) では容易に予測可能であるとし、「予測可能な、必然的な事態は、先行する事態をきっかけに即座に呼び起こされるものであるから、その性質を反映して形式的にもコンマを伴わない場合が生じていると言えるだろう。」(2010: 23) と述べている。

(12a) のようにコンマが挿入されると、読み手側にとって一時的に主節の事態の次に何が起こるか分からないことから、一種のサスペンスが生じる。それによって、関係詞節では予測しにくい事態が続くことがあるとも言えるかもしれない。しかし、(12b) のようにコンマを伴わない場合では、主節で表される内容から関係詞節で表される内容を予測することが常に可能であろうか。(4) は (12b) と同様、コンマ無しの継続用法の関係詞節を含む文である。例えば、(4d) で子守り役のメイドの Marjorie がもうすぐ 3 歳になる Jennifer に向かって指を立てて振りながら「いたずらっ子ちゃん」と言った時点で、次に Jennifer がとる行動を予測することができるとは思われない。予測可能性の概念でコンマの有無を説明することは難しいと思われる。

(12a) と (12b) では、主節が表わす事態と関係節が表わす事態が時間の流れに沿って起こったまま記述されており、2 つの出来事の間には福地 (1995:116) の言う「物語的 (narrative) なつながり」がある。しかし、そのつながりの強さ、緊密さには違いが感じられる。(12a) では、物語的なつながりがあるとはいえ、先行する事態が契機となって後続の事態が生じるという関係にはなっていない。それぞれ独立したものと捉えられる事態が時間軸に沿

て記述されているだけである。それに対し、コンマを伴わない (4) や (12b) では、先行する事態が契機となって後続する事態が生じていると解釈できる。このことが 2 つの事態の間の物語的なつながりを強めることになり、先行詞と関係詞節を一体化させ、コンマを伴わずに述べられているのではないだろうか。

5. まとめ

固有名詞やそれに準じる名詞句を先行詞とするコンマを伴わない非制限的關係詞節は、継続的用法の場合を除くと、中山 (2010) が提案する関係詞節の再分類によって、関係詞節の情報が伝達の中心と書き手に意識されることで先行詞と関係詞節が緊密につながり一体化した「記述的で中心的な関係詞節」として説明できる。しかし、継続的關係詞節とコンマの有無を説明するための予測可能性という概念については、検討の余地が残されていることがわかった。

【参考文献】

- 荒木一雄・安井稔 (編) (1992) 『現代英文法辞典』三省堂.
- 福地 肇 (1995) 『英語らしい表現と英文法一意味のゆがみをともなう統語構造一』研究社.
- Huddleston, R. D. & Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press.
- 中島文雄 (1971) 「Relative Clause の分類」『英語展望』33, 25-28, ELEC.
- 中山 仁 (2010) 「コンマを伴わない非制限的關係詞節に関する意味的・語用論的考察」『英語表現研究』27, 15-26.
- 長原幸雄 (1990) 『関係節』新英文法選書, 第 8 巻, 大修館書店.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- Swan, Michael (2005) *Practical English Usage*, 3rd. ed., Oxford University Press.

- 吉田正治 (1985a) 「固有名詞と關係詞節」『英語青年』 113/114号,
131(1), 8, 研究社. 228(1)-198(31).
吉田正治 (1985b) 「限定詞と關係詞節」『成城文藝』

(受稿 平成29年 1 月23日, 受理 平成29年 2 月 7 日)

